

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	ドラッグ使用者研究の系譜について : 「依存者」研究から「コントロール使用者」研究へ
Author(s)	佐藤, 哲彦
Citation	文学部論叢, 64: 83-98
Issue date	1999-03-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/9730
Right	

ドラッグ使用者研究の系譜について

——「依存者」研究から「コントロール使用者」研究へ——

佐藤 哲彦

Akihiko Sato

1 はじめに

本稿はドラッグ使用者研究の系譜⁽¹⁾について論じたものである。ドラッグ使用者と聞くと、ドラッグを手に入れるためには何でもする連中などといったステレオタイプ化されたものを思い起こす人が多いだろう。そこまで極端なものではないとしても、確かにドラッグ使用者は、ある時期まではある程度一つのパターンの中に収まるのではないかと思われてきた。逆に言えば、ドラッグ使用者研究はそのような一つのパターンの探求をその目的としていたともいえるだろう。もっとも、今日からすると、実はそのパターン化には一つの前提と一つの帰結が影響を及ぼしていたといえる。一つには、特に「依存」という考え方に顕著なのだが、ドラッグにコントロールされることによって一つのパターンに当てはまる存在になるのではないかという理論上の前提。もう一つはドラッグ使用者をみてきた多くの研究が、特定の階層のドラッグ使用者に限定してきてきたという方法に由来する帰結である。しかしながら今日では、施設外(street)でのインタビューと観察に基づき、これらをつき崩す形で「コントロール使用者(controlled user)」研究という一連の研究が現れている。

そこで本稿は、我が邦ではほとんど馴染みのないこのドラッグ使用者研究の系譜と「コントロール使用者」研究の知見を呈示し、最後にその系譜上の変化の含意について簡単に触れてみたい。

2 ドラッグ使用者研究の問い

そこでまず、ドラッグ使用者研究とは一体何の研究なのか、何を明らかにしようとするものであるのか、というところから話を始めることによって議論を限定していきたい。差し当たって研究史を考えてみよう。社会学におけるドラッグ使用者の研究は、家族や宗教などといったテーマのように、人類に普遍的に存在すると想定しやすい分野の研究とは異なり、その端緒からドラッグ政策（drug policy）と深い関連を持っている。つまりそのテーマへの関心は、それが逸脱であると定義されたことによって（あるいはその結果によって）喚起されたものであった。この認識は重要である。というのは、この認識に立ち、それに対する反省として六〇年代以降に隆盛となるドラッグ政策研究が現れてくるからである。しかしここではそれらの研究には立ち入らない。

では具体的にいて、ドラッグ使用者の研究はどのように出発したのか。ドラッグあるいはドラッグ使用者を対象とする社会学的研究は、宗教研究における幻覚剤（アルコール類）への言及 [Durkheim, 1912] などを除けば、合衆国のハリソン法（The Harrison Act 1914）による阿片使用の犯罪規定を受け、そのような害悪のあるものをどうして人は使い続けるのか、という問題関心から出発しているといつて良いだろう。そこで当初問題とされたのは、「依存（addiction）」として解釈された継続的使用であり、そのためにまず、教育という方面からこの阿片やモルヒネの危険性をどのように知らせていくかということが検討された [Payne and Archer, 1931 ; Schlemmer, 1931]。そしてそれと同時にその行動の社会学的説明が求められたのである [Brown, 1931]。ただしドラッグ使用者研究の先駆者の一人であるリンドスミスは、その著書の冒頭で次のように述べている。

「（この研究の）目的はもっぱら、阿片依存者の行動を理解し、その行動に関する合理的な理論的説明を供することにあり、さらには依存者の行動に関して道徳的あるいは倫理的な判断をすることを避けることにある。」 [Lindesmith, 1947, p.5]（カッコ内は引用者による）

このように、そもそものドラッグ使用者研究が、それが「依存者 (addict)」という使用者の中の特殊な形態に関するものであれ、使用者の行動を理解し説明しようという目的を持っていたということは重要である。というのは、そのような目的を掲げながらも、研究者にとってさえも長い間、ドラッグは「依存」へと必然的に結びついている運命のようなものであることが前提とされ、長年に渡ってドラッグ使用者の犯罪率（あるいは逆に犯罪者中におけるドラッグ使用率）や、ドラッグ使用と（ドラッグ使用以外の）犯罪との関係 (drug-crime connection) に主に関心が集まり、使用者の行動を理解し説明しようという目的が背景に下がってしまう傾向が見られたからである。⁽²⁾

もっともこれは、ドラッグ使用と（ドラッグ使用以外の）犯罪との関係を否定するものではないし、その議論の重要性を減殺するものでもない。幾つかの研究でも明示的に述べられているように、特に社会経済的階層として下層に属するドラッグ使用者の経済生活を明らかにしようとする場合には、ドラッグ使用と特に経済犯罪との結びつきを検討することは重要な論点の一つであるからだ。しかしその一方で、そのような研究は、現行のドラッグ政策を補強したり検証したりするという目的に限定されがちなものであったことも否定できないだろう。⁽³⁾つまりそのような研究は、ドラッグ使用者の研究を通して「人間と社会」を考察するというよりはむしろ、ドラッグ使用者の研究を通して人間や社会に対する「ドラッグの影響」を考察するものであるといえるのである。

しかしながらそのような傾向が現在まで続く一方で、結果的にドラッグ＝「依存」、ドラッグ＝（ドラッグ使用以外の）犯罪という図式自体に疑問を付す研究が、特に七〇年代終盤以降の米国に現れていることも注目に値する。そのような研究は多くの場合、使用者に対するインタビューや観察を基に使用者の生活を構成・維持していく要素を捉えることを目的としているものである。

3 研究の系譜 1: 「ヘロイン依存者」研究

さて、その「ドラッグ使用者」の研究だが、ここでは特に「ドラッグと共に生きる」ということの意味と説明を目的とする研究について、簡単にその系譜

を辿ってみることにしよう。

「ドラッグと共に生きる」ということでおそらく誰もが思い浮かべるのは、「依存」ということであろう。その意味では、この研究については膨大な蓄積があるといえる。特に阿片系ドラッグ (opiate drug) であるモルヒネやヘロインについては、リンドスミスをはじめ、ファインストーン、ブルブルとキャセイ、サター、フェルドマンなどがその初期の代表的研究として挙げられるだろう。⁽⁴⁾

リンドスミス [Lindesmith, ibid.] がその研究で明らかにしたことは「依存」に関する一般理論である。⁽⁵⁾ 彼によれば、「依存」と呼ばれるものは、精神医学や心理学のいうように本人のパーソナリティの不安定さに起因する特定の状態というよりはむしろ、退薬症候（禁断症状）をそれとして使用者が解釈することと、麻薬の再摂取によってその退薬症候が消失したと認識すること、主としてこの二つから始まる一連のプロセスである。その際重要なのは、麻薬そのものの薬効というよりはむしろ、退薬症候やその消失を麻薬の退薬や再摂取と結びつけて解釈させるような意味世界の存在であること。また再摂取は、麻薬そのものの魔力によるというよりはむしろ、特定の心身状況を退薬によるものとして解釈すること、元依存者というアイデンティティの不安定さ、依存者下位文化への価値のコミットメントなどによるということ。これらのことが論じられたのである。

ファインストーン [Finestone, 1957] は、黒人男性のヘロイン使用者の価値とモデルについて論じている。そこでは、黒人青年たちが、彼らのおかれた特有の社会的環境ゆえに、非暴力的な稼ぎ (hustle) と興奮 (kick) を人生の主たる目的とする「ジャズマン」と呼ばれる社会類型をモデルとし、それを学習するためにヘロイン使用へと入り込んでいく様が論じられている。

サター [Sutter, 1966] は、多くの研究が、「使用者の文化」といったときの、その文化という概念の持ついわば魔法のような力を（研究者にとっての）便利なフィクションに当てはめっていると批判し、多くの研究のように下位文化論からドラッグ使用者を論じるのではなく、ドラマツルギーの手法を用いて、ヘロイン依存者への道の一つのパターンを描き出している。そこではまず、登

場人物が「クールな人々の世界」と称される社会で、「クールな存在形態」を志向し、人々の前で「クールさ」を維持するために、犯罪へのコミットメントを有し、成功のイデオロギーを保持し、ドラッグを手段的に使用する。その場合、典型的には、当初少年たちはヘロイン依存者を軽蔑しているものの、街頭の最も優れた稼ぎ手 (hustler) が贅沢品であるヘロインの使用習慣を維持していることから、その評価を賞賛へと変えるということが明らかにされている。つまり、稼ぎ手の価値に対するコミットメントが新しい状況解釈を促し、それによって軽蔑の対象が賞賛の対象へと意味を変えるのである。そして当初は優秀な稼ぎ手の真似事として週末習慣を確立するが、「引つかかる (get hooked)」¹⁶⁾ ことによって依存者へとあゆみ、逮捕されることによって、あるいはその生活に疲れることによって、世間の退行者役割を反映した依存者 (あるいは元依存者 ex-addict) へといたるといっているのである。

フェルドマン [Feldman, 1968] は、ヘロインなどのドラッグ使用が見られなかったスラム地域に突然拡がりだしたその使用の様子と、病院のヘロイン依存者の観察結果を基に、スラムの行動原理が使用者とその帰結である依存者を作りだし、依存者でいつづけることを促していると説明している。

ブルブルとキャセイ [Preble and Casey, 1969] は、特に都市下層のヘロイン使用者の活動を描き出している。彼らは、使用者の生活がヘロイン配給の経済制度の周辺に位置していることから、その経済生活を二つの側面をもって描き出す。その一つは、ヘロイン流通過程の歴史的変遷とその流通との対応で変化する使用者の生活パターンである。もう一つは使用者の典型的な経済的キャリアである。もともと、経済的キャリアといっても、収入をどのように得るかということを中心とした生活パターンであり、それまでになかった使用者の主体的戦略などが新鮮に描かれている。そこでは、ヘロイン使用者は、従来の研究にあるように逃避のためにヘロインを使用するのではなく、生き生きとした生活を送るためにヘロインを使用しているのだと説かれている。ここで印象的なのは、彼らが「ヘロイン依存者」などいない、と言っている点である。彼らは、使用者はヘロインに「依存」しているのではなく、もし「依存」ということであれば、ヘロイン使用を含めたそのライフスタイルに「依存」しているとした

のである。

4 研究の系譜2：「コントロール使用者」研究へ

さて、以上のような研究、特にファインストンからブルブルとキャセイに至るまでの研究は、初期の「依存者」研究として評価される一方で、いくつかの問題をも抱えていた。すなわち、コミュニティ状況内での観察を導入したものとしては評価できるものの、対象者が黒人ばかりで一般性に欠ける、施設内とコミュニティ状況における使用者との区別がなされていない、などの点である。しかしながら、特にサターあるいはブルブルとキャセイの研究からも分かるように、ヘロイン依存者の研究は、当初のヘロイン依存現象に対する病理研究という比較的狭い視点から、使用者の生活を視野に入れた全体的な研究へと大きく転換したということは明かである。つまり、それは技法的な変化を伴っているのだが、使用者にとってのヘロイン使用の意味の探求（使用者視点）とライフスタイルの研究（社会文化的文脈）へと、その強調点を移動させつつあったのである。

その意味では、七〇年代に入ってからヘロイン使用者研究は、それ以前に出現した傾向を助長するものであった。すなわち、ライフスタイル志向の研究が盛んに行われたのである。例えば、依存者役割研究 [Stephens and Levine, 1971]、イベントを軸とした日常生活研究 [Agar, 1973]、使用者のヘロイン観と彼らにとってのコネクション（売り手）の重要性の研究 [Gould et al., 1974]、価値と役割に基づいた依存者への道 [Stephens and McBride, 1976] などが、初期の研究に重なる側面を有しつつも、この時期の代表的な研究として挙げられるだろう。

この時期には、マイナーながら重要な転換点をもみることができる。それは、「依存」にならない継続使用を行うヘロイン使用者を中心的な対象として描き出すヘロイン使用者研究である。もちろん、そのような使用者についての言及が、それまで存在しなかったわけではない。例えばファインストンの研究においても、「スクエア (square)」と称される一般人の中の使用者について僅かに触れられていたり、サターの研究においても週末習慣的使用のことが言及され

ている。しかしながら多くの研究において、そのような使用者は「依存者」へと至る過渡的な存在として位置づけられていた。しかしながらこの時期、七〇年代も終わり近くになり、「依存」へとは至ってはいない使用、すなわち「コントロール使用」のことが正面から扱われるようになってきたのである。このヘロイン＝「依存」という短絡的な結びつきを揺るがした研究として最も衝撃的であったとされるのは、ベトナム戦争時においてヘロインを常用していた帰還兵の追跡調査をしたロビンスの研究 [Robins and Helzer, 1975; Robins et al., 1980] である。彼は、戦争状況においてはヘロインを常用していた兵士たちであっても、そのような状況から抜け出て米国に帰ってくると、ヘロインそのものの薬理学的な力のみでは「依存」のままではいられないということを明らかにしたのであった。さらに同様の観点は、ジンバーグらによる「コントロール使用者」の研究 [Zinberg et al., 1975; Zinberg et al., 1977; Zinberg, 1985]、あるいはハンソンらによる大都市のヘロイン使用者研究 [Hanson et al., 1985] によっても明らかにされている。また、英国の例となるが、ブラックウェル [Blackwell, 1983] は、その研究の中で、調査したヘロイン使用者の4割強がさまざまな自己規制戦略をもってその使用をコントロールし、また2割弱が一度はヘロインを使用したものの、ドラッグやドラッグ常用のライフスタイルにコミットせずに使用を止めたことを明らかにしている。彼女もジンバーグらと同じように、依存がヘロイン常用の必然的帰結ではないことを明らかにしている⁽¹⁷⁾のである。

以上見てきたように、「ドラッグと共に生きる」という点から誰もが思い浮かべるような「依存」ということにしても、特に施設外 (street) の使用者研究においては、それが疑問視される方向に向いている。これを受けて「依存」という概念自体の無効性やその定義のあいまいさの問題を指摘する声もある(例えばウォルドルフら [Waldorf et al., 1991])。実際、ドラッグ使用を指示するいくつかの言葉—代表的には「ドラッグ」にはじまり「依存」「乱用」など—について、その定義が曖昧さに満ちていることは、多くの研究者の指摘するところである。

しかしおそらくここで論理的であり且つ重要なのは、それらを無効だとして

一方的に退けるのではなく、それらが力をもって語られる状況を分析することであろう。この点については、紙幅の関係からこれ以上立ち入ることはできないが、それらの言葉はそれを語る主体や状況のあり方と切り離して論じることは出来ないということだけはいえるだろう。「依存」や「乱用」などという言葉は、ほとんどの場合、使用者の間で日常的に使われている言葉ではないものの、その一方で特定の問題状況を指示する言葉もまたあるからである。

4 研究の系譜3：その他のドラッグ使用者に関して

さて、ヘロイン使用については以上のような系譜がある一方で、ほかのドラッグについてもまた、この「コントロール使用」という点が議論されている。それは一部には、米国のドラッグ政策である「麻薬戦争（war on drugs）」に刺激され、ドラッグとドラッグ使用者をステレオタイプ化していく流れに抗するという形で展開しているといえるだろう。特に「麻薬戦争」の敵として指名を受けたコカインについては、やはりヘロインと同様にコントロール可能であるということが論じられている。例えば、エリクソンとアレクサンダー [Erickson and Alexander, 1989] は、薬理学論文などの科学文献を詳細に検討する中から、そのコントロール使用が可能であることを明らかにしている。同様に、ウォルドルフら [Waldorf et al., *ibid*] は、足掛け15年にも及ぶ調査で、調査対象者である267人のうち約半数が、ネガティブな効果を避けつつ「コントロール使用」を行っていることを明らかにしている。もちろん彼らも、コカイン使用が多くの場合ネガティブな結果をもたらすということについては否定はしないが、しかしその調査結果と議論からは、コカイン使用にまつわるステレオタイプや専門家などによって語られるコカインの有害性に対しては、懐疑的にならざるを得ないのである。

また、ヘロイン以外のドラッグ使用者研究ということであれば、我が邦で最も知られているのは、ベッカーのマリファナ使用者研究 [Becker, 1963] であろう。これは、人がどのような過程を経てマリファナ使用者へと至るのかを、学習という観点から段階的に描き出したものである。ベッカーは、マリファナに「依存性」がないということを前提とし、マリファナ喫煙の快楽を求める自

然な欲求が、人に逸脱者経歴を歩ませるとしている。そのプロセスにおいては、その快楽の学習という過程が重要であり、特に、薬効を得るための喫煙法の学習、薬効の知覚とそれを喫煙を結びつけることの学習（ハイになることの学習）、感覚体験を楽しむことの学習、といった三段階の学習が必要であるとされている。ベッカーが呈示したこの図式は、マリファナだけではなく、ヘロインやコカインにも当てはまる⁽⁸⁾ことが明らかにされている。

そのほか、覚せい剤に関しては、キャリーとマンデルによる研究 [Carey and Mandel, 1968] が初期のものといえる。日本の事情とは異なり、米国での覚せい剤の注射による継続的な摂取は、1966年以前はそれほど多いとは考えられておらず、特に1965年以前は、薬局などで比較的容易に手に入れられたのである。したがって覚せい剤使用者の研究はこれ以降の動きとなる。キャリーとマンデルは、当時問題とされた若者の集団による覚せい剤使用行動を、ドラッグの化学的効果、使用環境、法の影響の三要素の相互作用の結果として捉えている。また、LSDについては、ヒッピー運動の思想性との関連でその使用を論じた研究 [Cavan, 1970] や、使用者自身の言語を用いて彼らにとってのLSD体験の構成のされ方を論じた研究 [Stoddart, 1974] が初期的なものとして挙げられるだろう。一方、今日のLSD使用者の研究では、使用者の多くが中産階級以上の若者であり、日常からの脱出といった意味あいで使用していることが論じられている [Henderson and Glass, 1994]。

5 「コントロール使用者」のコントロール

さて、ドラッグ使用者研究には、特に「ドラッグと共に生きる」という側面を論じるだけでも、以上述べたような系譜がある（そしてこれもまた一部に過ぎない）わけだが、以下では特に今日重要な意味をもつ「コントロール使用者」研究における要点について述べてみたい。

「コントロール使用者」研究を進める上での仮説は、「人々は何らかの中毒性物質と付き合いながら、それをコントロールしてきた」というものである。例えばジンバークらは、これを端的に以下のように述べている。

「中毒性物質（intoxicants）との何世紀にもわたる経験は明らかに、禁止（prohibition）ではなく、その物質の使用を監督するに際して人道的で合理的成功を収める唯一の方法である社会的制御（social control）を示している。社会的制御とはこの場合、ある社会が、さまざまな法的制限の下で中毒性物質の使用を許可し、許容できる使用を決めるさまざまな慣習・儀礼・社会的制裁を発達させることを意味する。」[Zinberg et al, 1975、p.165]

これはアルコールを念頭におくと比較的分かりやすい。地域によってはアルコールの摂取を禁止していることから分かるように、アルコールもまたドラッグとして定義される可能性を持つものである。一方、アルコール使用を依存にならずに継続していくということは、アルコール使用に割り当てられた慣習・儀礼・社会的制裁と密接な関係を保ちながら摂取を行っていくということの意味している。つまり、社会的飲酒者（social drinker）として期待される役割を演じるということである。

このような前提に基づくと、ドラッグ使用をトラブルを避けながら継続していくということは、そのドラッグ使用習慣の回りに発達した慣習・儀礼・社会的制裁を受け入れながら、ドラッグと付き合っていくということとして考えられる。それは常に発達過程にある慣習や儀礼かもしれないが、いずれにしろ、ドラッグ使用を継続するということは、それを継続できるだけの所作を伴うということの意味しているのである。

もともと、そのような慣習や儀礼は規範として流通しているわけではない。ドラッグがドラッグとして禁止されている以上、そのような慣習や儀礼が発達する余地は、少なくとも一般的にはないからである。しかしながら、ドラッグ使用に至る過程は、ほとんどの場合、使用者集団内での相互作用をその基盤として必要とするものである [Becker, *ibid.* ; Waldorf et al., *ibid.* ; 佐藤、1996]。したがって、使用者が「コントロール使用者」として使用を継続していくに際しては、使用者集団内において発達した慣習や儀礼、社会的制裁に沿って使用習慣を発達させていく。そのことによって、LSDやマリファナだけではなくヘロインでさえも、問題状況を避けながら長期にわたって使用を継続し

ていくことができる。ジンバークらが主張したのは、まさにこの点であった。

ジンバークらは、そのような社会的制御の諸形態を羅列的に主張している。具体的にいえば、ドラッグ使用は余暇に限定され、そこでの「規則」のうち、よく口にされるのは「独りでは使用しない」「学校や仕事場ではまずやらない」「知らない人とはしない」「適量」「特別な状況だけです」といったものである [Zinberg et al., 1975, pp.170-1]。LSDの場合は、特に「居心地のいい場所で信頼できる人と一緒のときにのみ」という限定が加わるが多く、また、阿片系ドラッグの場合には、「ブツを共有しない」という限定が加わるとされる [Zinberg et al., op.cit.]。

そこで興味深いのは、ジンバークらはドラッグをコントロールするためには特別な抵抗力 (countervailing forces) がある、としている点である。というのは、例えば阿片系ドラッグなどの場合、もしその使用が発見されれば、不快な結果を生むことになりかねない。しかしながら、逸脱下位文化内に属しさえすれば、使用は価値あることとされる。つまり、通常の世界を送りながら使用を継続するのは何らかの抵抗力を有しなければ、非常に難しいことなのである。そこで彼らはその抵抗力を3要因に分けて論じている。①ドラッグそのものの効果、②ドラッグという概念の広さ、③パーソナリティ、がそれである。以下ではこれらを簡単に見ていこう。

まず①薬効に関して。例えばマリファナやLSDの場合は、薬効自体がコントロール・パターンを発達させるのを助けている。LSDの場合、使いすぎると疲れる、耐性が発達するなどにより、その作用が気に入れば入るほど、時折にしか使用しなくなる。特に、身体的な刺激を求める人ほど、十全な刺激を求めるために間隔を開けて使用することになる。あるいはマリファナの場合、その作用のマイルドさが、使用者に対し、自分好みの使用状況を見つけさせることを助けている。特に、使用者はさまざまな状況においてマリファナ使用を試みることによって、結果的に使用者の特定のグループへの依存を少なくしているという。

次に②ドラッグ概念の広さについて。使用者には、巷間いわれているような「アルコールは奴等のヤク、ドラッグは俺たちのヤク」⁽¹³⁾などという考え方はな

く、アルコールもドラッグの中に入れて考えているという。したがって、「ハイ」や「ストーン」といった状況もドラッグに特有のものではなく、あらゆる中毒性物質に適用される。そしてこのような考え方が、逸脱的な感覚を極小化し、一般的な社会生活にコミットしている感覚を容易にしておき、それが「コントロール使用」への係留点となっているとされる。

最後に③パーソナリティについて。ここでいうパーソナリティは、特にネガティブな傾向についての要因とされる。使用者の中には依存状態を希求するような人もいれば、すぐに強迫的使用へと向かう人も確かにいることはいるのである。しかし残りの使用者については、幼い頃からのアルコール教育や、社会制度との継続的關係、あるいはグループ内の制裁や儀礼の発達などが、「コントロール使用」へと至るかどうかを決めることになる。したがって、より重要なのは、グループ内の下位文化であり、これが「コントロール使用」への力となっていること、さらには、「コントロール使用者」も強迫的使用者を知っているものの、普段のつき合いは遠ざけていることだとされている。

以上のようなジンバグらの洞察を踏まえ、さらに新たな知見を加えたものに、ウォルドフらのコカイン使用者研究がある [Waldorf et al, ibid.]。ここではジンバグらの洞察を補足する意味で、彼らの「コントロール使用者」の特徴に関する知見を見ておこう。

ウォルドフらによれば、「コントロール使用者」が乱用とネガティブな効果を避ける要因は主として3つあるとされる。①心理的問題から使用していない、②生活（仕事、人生の選択肢、共同体感覚）をもっている、③限度を設けるためのルーティン、規則、儀礼を発達させている、というのがその3要因である。

まず「①心理的問題から使用していない」とは、ストレスや生活上の問題などをやりくりするために使用しているのではないということである。次に「②生活（仕事、人生の選択肢、共同体感覚）をもっている」とは、通常的な社会生活を営んでいるということの意味し、したがってドラッグが中心的な生活に耽るような理由がほとんどないということである。最後に「③限度を設けるためのルーティン、規則、儀礼を発達させている」というのは、例えば、眠れるよ

うに夜にはやらない、コカインに金を使う前に請求書には支払いを済ませる、などといった自分自身の取り決めをもっているなどのことである。もっともこれは人によってさまざまであるとしている。

このように述べる彼らは、しかしこの3要因のどれか一つのみによって乱用や「依存」が避けられるわけではなく、これらの要因の他に薬理作用や他の要因との相互作用によって、乱用や「依存」が避けられるかどうか決まってくる、としているのである。

6 終わりに

以上見てきたように、ドラッグ使用者研究は、「依存者」研究という初期のスタンスから、次第次第に「コントロール使用者」研究へとその趨勢を移しつつある。この転換は極めて興味深いものだ。というのは、確かにそこでは、ロビンズによる「ベトナム帰還の非依存者」の発見があり、資料的にはこれを契機に「コントロール使用者」研究が発展したといえるのであるが、しかしながら、この転換を支えているのは、実はそのような新しい現象の発見と共に、先に見たように、ジンバークが唱えたような研究の前提の転換なのである。当然ながらそこでは新しく観察された現象をそれまでのものとは断絶した理論的前提へと結びつける作業が必要であったのである。逆に言えば、このような観察結果をそれとして支持しないのであれば、「コントロール使用者」などという新たな地平は無視することができる。実際、当初のドラッグ使用者研究は、ドラッグ使用を「依存」への中間地点とすることによって、その地平に気づかないままでしたし、さらには今日においても、日本をはじめドラッグ（薬物）をポイズン（毒物）として錯誤して捉える地域では、その地平は黙殺され続けている。しかしながら今日のように、ドラッグ使用者の増加が社会問題となるのであれば、「コントロール使用者」という観点は重要な位置を占めることになるだろう。なぜなら、ドラッグ使用者の増加という現象は、誰もが「依存」に陥ったりもせずの使用し続けられることによって支えられていると考えなくてはならないからである。したがって現在必要となるのは、具体的な使用者の調査とその分析ということになるが、これは稿を改めて論じることにした。

注

- (1) 本稿でいうドラッグとは、法律で売買・所持・使用などが禁止されている薬物である。具体的には、麻薬と向精神薬（モルヒネ、ヘロイン、LSD、MDMAなど）、あへん、大麻（マリファナ、ハッシシなど）、覚せい剤（スピードなど）などである。もちろん中にはMDAやPCP、あるいはこれらを組み合わせたようなものなど、さまざまなドラッグがあるが、そのあたりの細かい話はそれほど重要ではない。したがって、アルコール、タバコ、有機溶剤などは扱わない。さらにドラッグ使用とは、ドラッグの効果を享受して使用することを意味する。また、ドラッグ使用者とはドラッグの効果を享受して使用する者である。このような定義はしかし、政治的なものでもあるし、暫定的なものでもある。というのは、もしかしたら明日大麻が解禁されるかもしれないし、タバコが禁止されるかもしれないからだ。その意味で原理的に重要なのは「禁止の歴史を有する」ということなのだが、以上のような取り決めで先に進む。
- (2) これを受けて人種や年齢、生得的特性などと結びつけられて議論されることが多かったと考えられる。
- (3) むしろ幾つかの研究はその目的に限定していることを明示してさえる（例えば [Grapendaal et al., 1995]）。
- (4) そのほかには例えば [Chen et al., 1964 ; Fiddle, 1967] などが古典的地位を占めているといえる。
- (5) ここでは彼のドラッグ政策研究には立ち入らない。[佐藤, 1995] を参照。
- (6) 「引っかかる」とは、使用者が退薬症候の発現を指示する際に使用する言葉の一つである。
- (7) 逆にいえば長期にわたって、ヘロイン使用者は自らの使用を自らコントロールできない使用者＝「依存者」として把握されてきたわけであり、ウォルドフらは、そのような解釈が大勢を占めてきた理由として少なくとも二点、研究者の保持する中産階級道徳による意識変容への恐れ、と、ヘロイン使用者のステレオタイプ化（センセーショナルな物語を欲するマスメディア・スケープゴートを欲する政治家・ネガティブな例しか見ていない治療の専門家）が挙げられるとしている [Waldorf et al., *ibid.*, p.140]。
- (8) フェルドマン [Feldman, *ibid.*] 参照。
- (9) ウォルドフほか [Waldorf et al., *ibid.*] 参照。
- (10) 戦争時に大量に使用されたものの、錠剤が中心であったためである。
- (11) 使用のピークは1967年とされている [Levinthal, 1996]。
- (12) 「ほとんど場合」というのは、例えば職業が医師である使用者など、独自の流通過程を保持する使用者は、ここでいうような使用者集団を必要としない場合もあるからである [Winick, 1961]。
- (13) これはカウンターカルチャー内でドラッグを語る際に多用された表現とされるものである。

参考文献

- Agar, M., 1973, *Ripping and Running*, Seminar Press
 Becker, H.S., 1963/1978, *Outsiders*, Free Press, 村上直之訳『アウトサイダーズ』
 新泉社

- Blackwell,J.S., 1983, Drifting,controlling and overcoming, *Journal of Drug Issues* 13, pp.219-36
- BrownL.G., 1931, The sociological implication of drug addiction, *Journal of Educational Sociology* 4(6), pp.358-69
- Carey,J.T. and Mandel,J., 1968, A San Francisco bay area "Speed Scene", *Journal of Health and Social Behavior* 9(2), pp.164-74
- Cavan,S., 1970, The hippie ethic and the spirit of drug use, in Douglas,J.D. ed. *Observations of Deviance*, Univ. Press of America
- Chein,I.,Gerard,D.L.,Lee,R.S. and Rosenfeld,E., 1964, *The Road to H.*, Basic Books
- Durkheim,E., 1912/1975, *Les Formes Elementaires de la Vie Religieuse*, 古野清人訳 [宗教生活の原初形態 (上・下)] 岩波書店
- Erickson and Alexander, 1989, Cocaine and addictive liability, *Social Pharmacology* 3, pp.249-70
- Feldman,H.W., 1968, Ideological supports to becoming and remaining a heroin addict, *Journal of Health and Social Behavior* 9(2), pp.131-39
- Fiddle,S., 1967, *Portraits from a Shooting Galley*, Harper & Row
- Finestone,H., 1957, Cats,kicks.and colors, *Social Problems* 5, pp.3-13
- Gould,L.,Walker,A.L.,Crane,L.E.,and Lidz,C.W., 1974, *Connections*, Yale Univ. Press
- Grapendaal,M.,Leuw,E. and Nelen.H., 1995, *A World of Opportunities*, State Univ. of N.Y. Press
- Hanson,B.,Beschner,G.,Walter,J.M.,and Bovelie,E., 1985, *Life with Heroin*, Lexington Books
- Henderson,L.A. and Glass,W.J., 1994, *LSD*, Lexington Books
- Levinthal,C.F., 1996, *Drugs,Behavior,and Modern Society*, Allyn and Bacon
- Lindesmith,A.R., 1947, *Opiate Addiction*, Principia Press
- Payne,E.G. and Archer,J.L., 1931, Narcotics and education, *Journal of Educational Sociology* 4(6), pp.370-79
- Preble,E. and Casey,J., 1969, Taking care of business, *International Journal of Addictions* 4(1), pp.1-24
- Robins,L.N. and Helzer,J.E., 1975, Drug use among Vietnam veterans : three years later, *Medical World News* October27
- Robins,L.N.,Helzer,J.E.,Hesselbrock,M.,and Wish,E., 1980, Vietnam veterans three years after Vietnam, in Brill,L. and Winick,C eds. *The Yearbook of Substance Use and Abuse* Vol.2, Human Sciences Press
- Schlemmer,R., 1931, Education with regard to narcotics, *Journal of Educational Sociology* 4(6), pp.380-85
- Stephens,R.C. and Levine,S., 1971, The street addict role, *Psychiatry* 34, pp.351-7

- Stephens,R.C. and McBride,D.C., 1976, Becoming a street addict, *Human Organization* 35(1), pp.87-93
- Stoddart,K., 1974, The fact of life about dope, *Urban Life and Culture* 3 (2), pp.179-204
- SutterA.G., 1966, The world of the righteous dope fiend, *Issues in Criminology* 2(2), pp.177-222
- Waldorf,D.,Reinarman,C.,and Murphy,S., 1991, *Cocaine Changes*, Temple Univ. Press
- Winick,C., 1961, Physician narcotic addicts, *Social Problems* 9, pp.174-86
- Zinberg,N.E.,Jacobson,R.C.,and Harding,W.H., 1975, Social sanctions and rituals as a basis of drug abuse prevention, *American Journal of Drug and Alcohol Abuse* 2, pp.165-82
- Zinberg,N.E. Harding,W.M.,and Winkeller,M., 1977, A study of social regulatory mechanisms in controlled illicit drug users, *Journal of Drug Issues* 7(2), pp.117-33
- Zinberg,N.E., 1985, The development of social controls over intoxicant use and their influence on social policy, in Brill,L. and Winick,C eds. *The Yearbook of Substance Use and Abuse* Vol.3, Human Sciences Press
- 佐藤哲彦, 1995, リンドスミスによる麻薬研究の二つの位相, 『京都社会学年報』 3, pp.39-56
- 佐藤哲彦, 1996, 嗜好の構成 : 薬物使用と社会制御, 『京都社会学年報』 4, pp.85-108

付記 本稿は平成十年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。